



- 自 学 ・ 自 立
- 思いやり・感謝
- 鍛 錬

ことばのちから

校長 小松 進一

— 「まだ 10 歳ですよ」 —

先日、12 年前に初版発行された『ようこそ感動指定席へ！～言えなかった「ありがとう」～』

(著者：志賀内 泰弘)を読み返した。この本は、中日新聞(愛知県内版)の人気コラム「ほろほろ通信」が、読者の熱望により書籍化したものです。心が“ほろり”とする「いい話」が 100 話書かれています。二話紹介します。

半田市の Y さん(49)は小学校の個人面談へ出掛けた。いつものことながら、少し不安を抱きつつ。というのは、小学校 5 年生の息子さん(H)が広汎性(こうはんせい)発達障害のため、集団行動が苦手だからだ。感情を伝えたり読んだりすることが難しく、周りの人とのコミュニケーションがはかりにくい。

新任の M 先生は開口一番にこうおっしゃった。「がんばってますよー」。続けて「僕は H 君のことが大好きです。毎日笑顔で近寄ってきてくれます。かわいらしいじゃないですか」。この一言だけで安心した。さらに「クラスのみんなが彼のできないことは助けてくれますよ」とも。H 君の机の上には、紙を折って作った小さなごみ箱が置かれてあった。一つのことに集中すると他のことに目が届かなくなってしまう、ごみが散らかしっぱなしになる。それを知った友達が、すぐに片付けられるようにと作ってくれたのだ。

「みんなと同じことができないことが多くて、友達から責められることがありました」と相談すると、先生は「まだ 10 歳ですよ。大丈夫

夫です。もし彼を責める子がいたら『君だって完璧な人間じゃないだろ』と教えてやります。

「でも、片付けができなくて・・・」と言うと「かっこいいじゃないですか。小さいことを気にしないで」。そんな見方があるなんて驚いた。先生は最後におっしゃった。

「この一年で『こんなこともできないの?』と反対に友達に言えるくらいに成長させましょう」。Y さんは、先生の大きさを感じ、温かな気分で家路に就いたという。

新幹線の駅で切符を買おうとしたときの話だ。・・・ようやく自分の番になった。ところが手元のお札が古いせいか、何度入れても戻ってきってしまう。焦って後ろを振り向くと、長い列となっていた。視線が背中を刺すように痛んだ。何とか機械を通り、ジャラジャラッとお釣りが出てくる。気がせいっているせいか、つかんだ手から 100 円玉が床に落ちてしまった。いつ怒鳴られるんじゃないかとさらに焦った。

慌てて拾う背中に、後ろの男性が関西弁で声をかけてきた。「慌てんでもええがな、ゆっくりやりなはれ」。振り向くとニッコリほほえみを投げかけてくれた。心の中のイライラが一瞬に消えうせていた。

あの新任の先生の台詞も券売機の男性の一言も、人の心を温かくしてくれます。その言葉で人生が変わることもあります。言葉の力は大きい。

いつも「ほろほろ」する言葉を言いたいですね。

